〈別紙〉

出展決定　招待アーティスト

青木 陵子 ＋伊藤存

2000 年結成・京都在住

2000 年から共同で活動を開始。交互に素材を交換しながら予測できない展開を生む筋書きのないアニメーションの制作を始める。2011 年より人の情緒の成長を観察し制作された映像インスタレーション作品「9歳までの境地」を継続的に制作。石巻市では、土地の中に在る素材やもの、小さな技術などを見つめ、人がつくる事自体に焦点をあてた作品群を展開。以降、様々な時や場所、人やものに出会いながら、つくることを通して共同で考え続けるプロジェクトを行なっている。

《9 歳までの境地》2011 年、国立国際美術館
撮影:福永一夫

青野 文昭

1968 年　宮城県出身・在住

1991 年より「再生と循環」をテーマに活動。「修復」という根源的かつ普遍的な概念を深く掘り下げ、いわゆる「つくるいとなみ」とは異なるタイプの創造性を探求。1996 年頃から、各地で見つけた破片を「修復」したり「補完」したりする試みを始めた。2011 年の東日本大震災で甚大な被害を受けた以後は、多層的な文脈（震災、歴史、場所、記憶、物語など）を考慮した「総合的復元」に取り組んでいる。

《なおす・代用・合体・侵入・連置「震災後東松島で収拾した車の復元」2013-1》2012 年
あいちトリエンナーレ 2013

Artist in Residence KOBE (AiRK)

2022 年結成・兵庫県を拠点に活動

2022 年 4 月より、神戸市中央区北野エリアで運営を開始したアーティスト・イン・レジデンス。神戸市内の文化施設や団体と提携し、招聘されたアーティストを滞在施設として受け入れる「Partnership Program in Kobe」と、自主企画として国内外のアーティストを招聘し、神戸市内でワークショップやイベントを開催するなど、地域とアーティストとの交流を促進する「Program by AiRK」「AiRK OPENCALL」といった活動を軸に、さらなる神戸文化の活性化を目指す。

Photo: Junpei Iwamoto

雨宮 庸介

1975 年　茨城県生まれ、山梨県在住
2013 年　サンドベルグインスティテュート(アムステルダム)ファインアート修士課程修了

ドローイング、彫刻、パフォーマンスなど多岐にわたるメディウムによって作品を制作。リンゴや石や人間などのありふれたモチーフを扱いながら、超絶技巧や独自の話法などにより、いつのまにか違う位相の現実に身をふれてしまう体験や、認識のアクセルとブレーキを同時に踏み込むような体験を提供する—そんな作品を通じて「現代」と「美術」について再考をうながすような作品を制作している。

《Apple》2024 年

アルネ・ヘンドリックス

1971 年　オランダ生まれ、アムステルダム在住
2011 年　アムステルダム大学卒業

アムステルダム在住のアーティスティックリサーチャーのアルネ・ヘンドリックスはキュレーターや歴史家でもあります。彼の多角的なアプローチはアーティスト、サイエンティスト、そしてジャーナリストの視点を持っています。そのリサーチは人々に、長い間社会で認識されてきたトピックに関して、疑問をもつ手助けをします。彼の主な研究対象は未来の人間の身体、癌の今後の推移、継続的な経済成長、そして人が小さくなる可能性や願望についてです。

《Fatberg》2016 年−現在も継続中、NDSM Amsterdam

nl /rokko project（エヌエル　ロッコウ　プロジェクト）

2022 年 9 月　神戸市六甲山町にて結成・プロジェクトスタート
（主なメンバー　小泉寛明、ロク・ヤンセン）

nl/rokko project は、ROKKONOMAD を運営するチームメンバーにより結成された「これからの働き方」を探求するリサーチグループです。オランダ王国大使館の協力のもと、オランダと日本をつなぎ、社会問題にチャレンジするプロジェクト「nl/local project − オランダとつくる、私たちの未来−」のメンバーの一つとして活動しています。

《「 成長」って何？》2023 年、ROKKONOMAD
六甲ミーツ・アート芸術散歩 2023 beyond

大野 智史（おおのさとし）

1980 年　岐阜県生まれ、山梨県富士吉田市在住
2004 年　東京造形大学造形学部美術学科卒業

1980 年岐阜県生まれ。2004 年東京造形大学卒業。現在山梨県富士吉田市にて制作活動を行っており、原生林のエネルギーを感じながら、自然や現代社会における自我の内面を表し、追求してきた。
自然と人工、生と死、光と闇、東洋と西洋など、相対する価値観を画面の中で融合し、共存させている点が特徴。その中で自画像、両性具有、原生林、亜熱帯植物、プリズム、スピーカーといったモチーフは、重要な要素となっている。その世界観は幻想的でパラドックス、豊穣でカオス、空想と現実の両視点で、根源的な答えと調和を探し続けている。

《Sleep in Jungle.》2018 年、
Daimler Contemporary Berlin、ドイツ
Photo by Kenji Takahashi ©Satoshi Ohno,
Courtesy of Tomio Koyama Gallery

小出 ナオキ（こいで）

1968 年　愛知県出身、千葉県在住
1992 年　東京造形大学造形学部美術学科卒業

1968 年愛知県生まれ。1992 年に東京造形大学造形学部美術学科を卒業し、現在は千葉県を拠点に制作活動を行っている。
活動初期には、小出の個人史ともいえる生活の転機をテーマに FRP や木などを素材とした立体、写真作品を発表。2010 年滋賀県立陶芸の森での滞在制作より、セラミックでの作品制作を開始し現在まで継続する手法となっている。近年は自分の心の表れを正直に表現し、思考のバイアスを超え物理的な負荷から生まれた、ありそうでない壮大で楽しい作品世界観は不可思議な魅力にあふれている。

《picnic with undead》2017 年、
Photo by Ikuhiro Watanabe
©Naoki Koide, Courtesy of Tomio Koyama Gallery

たおかかずや　オマルトヴェンザー
田岡 和也 ×Omult.Venzer

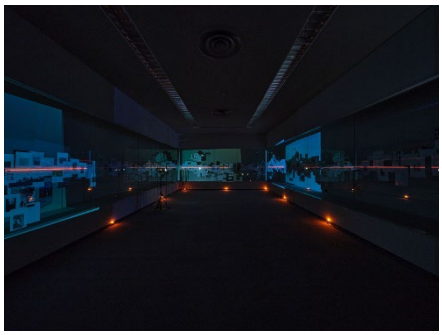
日常と山体験をことごとく作品化する田岡和也と、制作において「遊びの延長」を指標する Omult.Venzer（オマルトヴェンザー）の、2 度目の協働によるユニット。
田岡は山歩きが趣味で、六甲山にも頻繁に登っている。山に登る度に1冊の ZINE「山と TAOKA」を制作しており、その数は 110 冊を超える。
Omult.Venzer は「遊びの延長」を理念とする、造形アートブランド。「もの作りは生活を豊かにするための根源的な遊びである」との考えから、日常への目線をユーモラスに表現した作品を製作する。

撮影:和田真典
Masanori Wada

たけなかみゆき
竹中 美幸

岐阜県出身、東京都在住
多摩美術大学大学院美術研究科修了

主に透明な素材を用いながら、光や影を取り込んだ平面作品やインスタレーションに展開。記憶や記録に興味を持ち、近年では 35mm 映像用ポジフィルムに直接光を感光させ、消えゆくメディアに消えゆくものの影を記録させた作品なども制作。見過ごしてしまいそうな景や、物の記憶をそっと掬い上げ記録し、作品に昇華させている。



《終わらぬ旅》2023 年、
スイトピアセンターアートギャラリー、撮影：中村晃

ならぎのよしこ
楢 木野 淑子

1985 年　大阪府出身・在住
2010 年　京都精華大学大学院芸術研究科博士前期課程修了

植物や山、動物などをモチーフに陶の持つ質感や色彩、形やその重みを使うことで、一目見て心が跳ねるような、何か良いことが起こりそうな予感を抱くものを目指して制作しています。
土に日々を刻み、土から陶になる作品は、重みと厚みを携えながらキラキラと煌めき華やかさや豊かさ、生命力が溢れる喜びを謳い上げます。自然と人が作り上げるユートピアがそこにはあります。

《山のトーン》2024 年、
Kyoto Art for Tomorrow 2024 —京都府新鋭選抜展—
京都文化博物館（京都）

にしだひでみ
西田 秀己

1986 年　北海道出身、東京都在住
2014 年　ベルゲン芸術デザイン大学芸術学部修士課程 修了

ノルウェー王国ベルゲン芸術デザイン大学芸術学部修士課程修了。光州ビエンナーレ（2014 年／韓国光州）、札幌国際芸術祭（2014 年／札幌）ほか多数で作品を発表。ロンドン、台湾での活動を経て、2018 年から 2019 年にかけてポーラ美術振興財団在外研修員としてモスクワに滞在。風景と人との対話を生む環境インスタレーション作家として活動するほか、舞台美術、空間デザイン、インスタレーション、パフォーマンス等も手がける。

《fragile chairs》2017 年、飛生芸術祭 2017
ポロト湖（北海道白老町）撮影：西田秀己

野村 由香（のむら ゆか）

1994 年　岐阜県出身、京都府在住
2019 年 京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程彫刻専攻 修了

日常生活や社会、自然に通底している根源的な力の作用について関心を持っています。世界を動かす力の作用とそのベクトル、そこに流れる固有の時間を造形やインスタレーションとして表現しています。制作を通して日常を別の角度から捉え直すことで、私たちの世界の未知の「かたち」や「わからなさ」に触れ、生きるということはどういうことなのかを考えようとしています。

《池のかめが顔をだして潜る》2022 年、
京芸 transmit program 2022
京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA、撮影:来田猛

堀田 ゆうか（ほった）

1999 年　愛知県出身、東京都在住
2022 年　東京藝術大学美術学部油画専攻卒業

絵画表現を起点とし、支持体を切り出し、その場に身体を折り畳んでいくように、イメージを折り重ねていく平面作品や、空間自体を支持体のように捉えたインスタレーション作品など、平面と空間を行き来しながら、捉え所のない身体の気配に触れようと試みる。
また近作では並行して版表現を作品に組み込むなど、様々なメディアを介したドローイングなども制作している。

《からです》2023 年、
からです、AP どのう(茨城)
撮影：室井悠輔

マキコムズ

2013 年結成

2013 年結成。立体が得意なマスダマキコ、平面が得意なカワサキマキによる主に子ども・遊び・作るをキーワードに展開しているクリエイティブユニット。「マキコムズ 」は双方の名前からと大人や子ども、周りの人を面白い事に巻き込み、巻き込まれてみよう！という意味も。日常の何気ないことから発想して、巨大な物、長い物、楽しい事、面白い事、バカバカしい事を思いついては、参加型の造形ワークショップや作品にしている。それぞれ二児の母。

《メー坊》2022 年、
六甲ミーツ・アート芸術散歩 2022

三原聡一郎（みはらそういちろう）

1980 年　東京都出身、京都府在住
2006 年　岐阜県立情報科学芸術大学院大学[IAMAS]卒業

世界に対して開かれたシステムを提示し、音、泡、放射線、虹、微生物、苔、気流、土、水そして電子など、物質や現象の「芸術」への読みかえを試みている。2011 年の東日本大震災を機に「空白のプロジェクト」を開始。以降より滞在制作にて、北極圏から熱帯雨林、軍事境界からバイオアートラボまで、芸術の中心から極限環境に至るまで、これまでに計 9 カ国
18 箇所を渡る。2022 年より「3 月 11 日に波に乗ろう」共同主催。

《自然の監視自然の生成》2019 年、
はかなさの果敢さ（国際芸術センター青森）
撮影：山本糾

ロプ・ファン・ミエルロ

オランダ出身、アムステルダム在住
2008 年　Willem de Kooning Academy,
Design Academy Eindhoven（アイントホーフェンデザインアカデミー）卒業

アムステルダム在住のイラストレーター/アーティストのロプは 2008 年アイントホーフェンデザインアカデミーを卒業。ファッションやカルチャー、ミュージックの領域でコラボレーションをしています。ロプの遊び心のある作風やアイコニックな作品で知られています。ペインティングだけでなく、毛足の長いモヘアのタペストリーやハンドメイドのウールのラグ、アニメーション作品などがあり、ほとんどの制作工程はドローイングやペインティングから始まります。

《バタフライ》2021 年、ベンチプレイヤーズ個展、
Reference Studios ベルリン

渡辺 篤（わたなべあつし）（アイムヒア プロジェクト）

1978 年　神奈川県出身・在住
2009 年　東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻油画修了

現代美術家／社会活動家。大学卒業後に深刻なひきこもりを経験したものの、回復直後から精力的に活動を展開し続けてきた。孤独・孤立にまつわる関係性の課題や、共感可能性と不可能性、社会包摂の在り方などをテーマに扱う。2018 年から「アイムヒア　プロジェクト」を主宰し、不可視化されがちな生きづらさやトラウマを抱える人々との協働企画を多数実施。活動家として、当事者運動やケア実践、メディア出演、講演なども多い。

《月はまた昇る（プロジェクト「同じ月を見た日」より）》
2020/2022、瀬戸内国際芸術祭 2022、
屋島山上（香川）　撮影：宮脇慎太郎

◆資料に関するお問い合わせ先

六甲山観光株式会社／神戸六甲ミーツ・アート 2024 beyond 事務局
TEL：078-891-0048（平日 9:00～18:00）　E-mail：press@rokkosan.com